

2017年
6月号

柳田ひでのり 市議会レポート



柳田 秀憲
やなぎだ ひでのり

民進党所属
2003年初当選 現在4期目
会派“民主クラブ”代表
住所 藤沢市片瀬山2-2-13
事務所 藤沢市鶴沼石上2-8-2
TEL0466-55-1620
FAX0466-55-1623
mail@hidenori-yanagida.net

子どもの貧困を考える ~子どもたちがすくすく育つ藤沢に向けて~

子どもの「貧困？」

生まれ育った環境によって、その子の将来が決まってしまう。今や日本はそんな国になりつつあるのではないか。

「子どもの貧困」については、新聞報道やテレビの特集番組^{※1}が放映されたこともあり社会問題として認識されてきたと感じる。番組では、働く母親に代わり家事をしなければならず友だちと遊ぶ時間がない小学生、経済的に厳しいので高校でバスケットボールを続ける事を諦めた中学生、仕事が休めずお金もないので家族旅行が出来ないと嘆く母親の姿が映し出されていた。

こうした事例を見て「これで貧困なのか?」と思った人もいるかもしれないが、現代の貧困は「絶対的貧困」から「相対的貧困」へと焦点が移っている。戦後間もない頃のような、住む家もなく必要最低限の食事もままならず服や靴もろくにないような貧困=絶対的貧困ではなくて、標準的な家庭と比べて生活上必要なものが欠けているという「相対的貧困」が問題なのだ。

子どもにとっての必需品とは

今、日本では6人に1人の子どもが相対的貧困ラインを下回っており、藤沢市でも全国平均と同等の水準だ^{※2}。国の基準では、両親と子ども2人の4人世帯では年244万円=手取り月約20万円以下なら相対的貧困となる。「手取り月20万円あれば貧困家庭ではない」という人もいるだろう。だが、相対的貧困は一見して分からない「見えない貧困」と言われ、所得だけで見ていると困窮の度合いを見逃すことになる。それを可視化するのが「剥奪指標」で、子どもの必需品のうち貧困によって「何を奪われているのか」を明らかにするためのものだ。

これについては、阿部彩首都大教授らが2008年におこなった「子どもに関する社会的必需品」についての市民意識調査を^{※3}紹介したい。

「希望するすべての子どもに絶対与えられるべきである」で上から①朝ご飯(91.8%)、②医者・歯医者に行く

(86.8%)、③遠足や修学旅行などの学校行事への参加④学校での給食、⑤手作りの夕食、⑥高校・専門学校までの教育、⑦絵本や子ども用の本、の順に高い支持が得られた。ここまでが、50%以上の支持である。命や健康に関わるもの・学校教育に関わるものは必要だという人が多いが、「年に1回くらい遊園地や動物園に行く」は35.6%、「友だちを家に呼ぶこと」は30.6%と、子どもの成長に欠かせない人との関わりや経験・体験に関するものは「与えられたほうが望ましいが、家の事情で与えられなくても仕方ない」とする意見が過半数を超えている。

さらに、「周囲のほとんどの子が持つスポーツ用品やおもちゃ」は、「絶対に与えられるべき」は12.4%しかいない。だが、この項目は英国の調査(1999年)では84%の市民が支持している。

子どもの貧困対策が進んでいると言われる英国では、政府が子どもの貧困の撲滅を公約し、貧困状態の子どもが1999年340万人→2004年270万人と^{※4}一定の成果が出ている^{※5}。子どもにとっての“必要”とは何か。国民の合意を得るために、全国的な調査・議論が望まれる。

国と藤沢市の子どもの貧困対策

こうした中で、日本も2013年に「子どもの貧困対策法」を制定、翌年には「政府大綱」を策定し、国および自治体の取り組みが示された。格差が拡大し、その格差が子どもに影響を与え、親世代の格差が子どもの世代にも連鎖し格差が固定化されていく。国を揺るがす問題だと政府が認めた意義は小さくないだろう。だが、「貧困の定義がなされていない」「指標が精査されていない」「数値目標がない」「財源の保障がない」といった問題点が指摘されている^{※6}。

一方、藤沢市はどのような取り組みをおこなっているのだろうか。藤沢市には、子どもの貧困対策についての行動計



画はないが、「子ども・子育て支援事業計画」がある。この計画では市の将来像を

**「未来を創る子ども・若者が
健やかに成長する子育てにやさしいまち」**

とさだめた。施策の数は153あり、生まれてから(生まれる前も)青年期まで、切れ目ない支援をおこなうようになっている。「命・健康に関すること」という意味では、小児医療費の無償化や中学校給食の実施拡大などは当を得ていると言える。ただ、子どもの貧困対策については、施策は「生活困窮世帯の子どもに対する学習支援の充実」など三つだけ、と物足りない。子どもの貧困対策に積極的に取り組むためには、子育て支援計画の一部ではなく独立した政策体系が必要ではないか。

議員提案で政策条例を

そこで我が会派は市に「子どもの貧困対策計画」の策定を義務づける「政策条例」を議員提案できないか、と考えた。

条例の目的及び手段

- 究極目的：子どもの権利の保障、安心して子どもを育てられる地域づくり
- 直接目的：子どもの貧困の予防・解消
- 手 段：行動計画の策定による施策の推進

条例作成については、日弁連の自治体連携センター条例部会長の幸田雅治弁護士(神奈川大教授)らの弁護士チームに支援を依頼した。調査方法や指標の設定など難しい課題があるが、なんとか成案を得たいと考えている。

子どもの貧困の解消をめざすのはなぜか。子どもの貧困対策と少子化対策とは重なる面がある。子育てする親が、そして子どもが将来に夢や希望を持ってない社会に明日はない。国家存立に関わる大問題といっても言い過ぎではない。

しかし、国のためにという以前に、そもそも子どもには成長・発達する権利があるのだ。阿部彩教授は前書で『子どもの数を増やすだけでなく、幸せな子どもの数を増やすことを目標とする政策である』と述べている。また、慶応大の井出英策教授は『子どもの貧困対策は“可哀想だから”ではなく“理不尽だから”必要なのだ』と訴えている。そう、生まれ育った環境で子どもの人生が決定づけられるのは理不尽なのだ。理不尽がまかり通る社会は変えなくてはならない(了)。

※1.『NHKスペシャル 見えない“貧困”～未来を奪われる子どもたち～』2017年2月12日放映
 ※2.厚労省調査16.3%(2012)、藤沢市内の小学生の就学援助認定率14.5%、中学生19.1%(2015)
 ※3.阿部彩『子どもの貧困 日本の不公平を考える』岩波新書2008より
 ※4.阿部彩『子どもの貧困 日本の不公平を考える』岩波新書2008より
 ※5.(その後、2010年に英国は政権交代して政策転換がおこなわれ「目標達成義務の廃止」「年次報告の廃止」「子どもの貧困という言葉の掃」など「改悪」した)中島哲彦「多様にとらえる子どもの貧困」『子どもの貧困ハンドブック』かもがわ出版2016より
 ※6.中島哲彦「子どもの貧困対策法とは?」『子どもの貧困ハンドブック』かもがわ出版2016より

視察報告 図書館



©武蔵野プレイス

私は今年に入ってから1都4県10箇所の図書館を視察した。その中から、今回は「武蔵野プレイス」を紹介したい。

『武蔵野プレイス』。正式名称は武蔵野市立『ひと・まち・情報創造館 武蔵野プレイス』で、図書館が市民活動や青少年活動の支援もおこなっている、と考えてよいだろう。来館者数は昨年度実績195万人と桁違いで、今年200万人を突破するだろうと予想されている人気施設だ。開館3年もすれば来館者数は落ち込んでいくのが普通だが、ここは年々増えているという。その秘密はなんだろうか。

武蔵境駅前という立地、建築賞を受賞した意匠の魅力、運営にあたる公益財団のスタッフの努力、などがあげられるが、決め手は **これまで自治体サービスから遠かった層をターゲットに加えた→ビジネスマンと若者** だろう。まず、ビジネスマン向けとして、開館時間を22時まで延長し、仕事帰りの人が利用できるようにした。560タイトルもの雑誌はカフェに持ち込み自由で、図書館＝教育施設にもかかわらず17時以降はアルコールも提供する。ノマドワークに使える有償の専用席も用意されている。

そして、青少年だ。地下2階が「ティーンズスタジオ」となっており、小学生から20歳未満の青少年が自由に使える **「スタジオオラウンジ」** というスペースを作っている。人に迷惑さえかけなければ何をしてもよい場所だ。カップラーメン用のお湯や電子レンジが用意されていて、食べながら友だちとおしゃべりできる。テーブルサッカーゲームも置いてあって、賑やかだ。何より、ここは **大人立ち入り禁止、青少年の「聖域」** になっているのが素晴らしい。この他、バンド練習ができるスタジオやダンス練習のためのスタジオもある。青少年フロアのスタッフは、時には子どもの悩みの相談を受けることもあるとのことだが、基本は「寄り添う」=つかず離れず、だ。私がティーンズの頃にこんな施設があれば良かったなと思っていると、案内してくれた副館長さんも同じ事を言っていた。

世代を問わず多くの人から支持されているのは、「**人々の交流を促す**」というミッションが徹底されているからだ。カフェでは『武蔵野トークングアバウト』という好きな本や映画を互いに紹介し合い語らう、催しが開かれる。知らない同士だった参加者が仲良くなって帰っていく。カフェもプレイスのミッションに一役買っているのだ。

「プレイスがあるから、この街に引っ越してきた」という人もいるそうだ。施設異利につきてはではないか。